

わが国の搾油のはじまり 住吉大社と遠里小野村

わが国で初めて灯火用として搾油された記録としては、「搾油濫觴」（衢重兵衛編 文化7年1810年刊）によるものがあり、それによれば「摂津の国の住吉大明神（住吉大社）において行われた神事で灯火が使われ、その灯明油として献灯するため、同じ摂津の国の遠里小野村において、榛（はしばみ）の実の搾油がなされた」といわれている。遠里小野村はこれにより、社務家から御神領のうち免除の地を与えられた、という。これがわが国の搾油の始まりとされている。

その住吉大社であるが、太閤検地によってそれまで12万石あった神領地が2060石までに減らされてしまって、遠里小野村の大半も取り上げられてしまった。遠里小野という名称は、住江（住吉）周辺部の原野という意味もあるようで、その後も遠里小野村との間に入り込んでいた住吉大社領で菜種を栽培し遠里小野村で搾油し住吉大社の灯明に使われたとのことである。

下の錦絵は、初代長谷川貞信（1806 - 79）江

戸後期から明治に活躍した浮世絵師の手に成るもので「浪花百景 住吉高燈籠」の図である。

実に美しい浜辺で、住吉大社が江戸末期まで海に面していたことがわかる。絵の右に見えるのが当時境内にあった高燈籠である。伝説によれば鎌倉時代末期に灯明台が点じられ、一尺二寸（36.36cm）の土器に遠里小野の油が一晩で9升焚かれたといわれている。

高さは16メートル。大阪湾の灯台として船の航行の安全に寄与した。高燈籠は播磨灘から大阪湾へ入る明石海峡から見て正面に位置し、ちょうど明石海峡から見える高さなっているとのことである。

大阪の住吉大社は、博多、下関にある三大住吉神社の一つで、全国にある住吉神社約2300社の総本社である。神功皇后により鎮祭され、その年は、神功皇后11年、『帝王編年記』によって推定される西暦は211年である。祭神は底筒男命、中筒男命、表筒男命そして神功皇后である。前三神



「写真浪花百景 上編 中編 住吉高燈籠」（長谷川貞信）

大阪市立図書館 蔵

は、住吉大神といわれいづれも海の神である。

住吉大社の背後には、当麻・斑鳩の大和朝廷の中枢に一気に至る磯齒津道（住吉街道）があり、海に向けては、聖徳太子の「日出国・・・」の親書を携えた遣隋使、小野妹子が出港したところでもある。少し下れば元寇に際して住吉の浜で蒙古撃退「浜祈祷」が行われたと伝えられている。正に当時の日本の玄関口である。

そうした国の威信にかかわる重要な位置に住吉大社は鎮座していたことを思えば、その灯明油の生産を担った遠里小野村の役割は極めて重要であったと思われる。

しかし山崎の荏胡麻油生産にとって代わっていく菜種油の製油を始めた遠里小野であるが、何時から菜種油が製油されたかは定かでない。

『製油濫觴卷』（文化7年 1810）には「元和年中（1615 - 24）、大坂御平定の後、＜中略＞遠里小灯明油の油は、遠里小野其外処々の油売の輩多く此地に引移り、蕒苔子の製法、搗押木の功ミまで細密に工夫を加え、いよいよ盛に行はれしかは、

諸国に残りてありし長木の製も明歴（1655 - 57）の頃より絶て用ゐざる事となつて、諸国の油を製するに一統に此の搗押木によらざるはなし、・・・今において住吉明神の灯明、其の外年中行事行はるゝところの神事に用ゆる灯油は、皆遠里小野より修め奉れり、・・・」とあり、元和より前の16世紀のころより菜種油が本格的に登場したとも推測される。

また、『墨江村誌』（昭和4年刊行）によれば「文化の頃に若野弥左衛門（俗称 鹿間）が正月四日の若菜の株を捨て置いたのに花が咲いて細粒が稔つたのを絞つて油としたのが、此地油製造の始めであると云ふが、此地の油製造はしかく新しいものではない。此は従来真樺の油であつたものを此時から菜種の油を絞つたので、その起源についての伝説であらう」とあり、遠里小野での菜種油搾油の始まりは、今後の調査研究がまたれるところである。

現在の住吉大社の東門を出て、熊野街道を大和川・堺方面へ向かうと細江川を越えて20分ほど



『蘆分船』巻二 一無軒道治 著 延宝3（1675）年

国立国会図書館 蔵

で「おりおの商店街」の看板が目に入る。今では住宅街で菜の花が咲き乱れた「油田」は想像もできないが、住吉大社と遠里小野は切っても切れない関係だったことがその近さからも実感できる。

また、東門から磯齒津路を行くと菜種油を絞っていた「太田製油所（天保年間創業）」跡（現在すみよし村ギャラリー）や土蔵があり、その先

の浄光寺には「油かけ地蔵」が祭られている。この地が油と縁の深いところであることが随所に見てとれる。

こうした灯明、製油の歴史の始まりに位置する住吉大社へは、江戸期の大坂油問屋関連の商人の繁盛をしのぶ立派な石燈籠が奉納されている。





正(西)面

菜種絞油屋
三郷世話人
豊田屋安兵衛
塩屋喜兵衛
茨木屋作次郎
天王寺屋治兵衛
天満郷世話人
川崎屋與之助
垂水屋五良兵衛
大鹿屋治助
播磨屋弥兵衛
播磨屋次二郎
櫻井屋卯兵衛
山田屋勘兵衛
布屋五良右衛門
南郷世話人
河内屋治兵衛
加勢屋半兵衛
山城屋宗七
油屋勘兵衛
升屋仁兵衛
灘屋伊右衛門
安治川世話人
榎並屋新助
豊後屋和吉
綿實絞油屋
三郷世話人
小松屋孫八
淡路屋治七郎
通路人
近江屋利助
近江屋篤兵衛

北面

天満郷
播磨屋與兵衛
池田屋三右工門
大和屋嘉兵衛
小林屋宗兵衛
播磨屋宗次郎
播磨屋平三郎
河内屋山兵衛
油屋喜太郎
播磨屋徳三郎
播磨屋新蔵
藤屋伊兵衛
平松屋忠兵衛
油屋徳次郎
箒屋三良兵衛
小林屋岩吉
河内屋久七
大和屋太兵衛
節屋源助
櫻井屋藤七
針屋忠右工門
播磨屋儀兵衛
紀国屋弥兵衛
大和屋弥兵衛
安治川
榎並屋七兵衛
津国屋與七
豊後屋市兵衛
筒井屋油店
大黒屋徳松
大黒屋松之助

南面

南郷
肥後屋孫助
かせや萬吉
小松屋孫七
小松屋政吉
傳法屋宇兵衛
伊勢屋吉五郎
因幡屋佐七
松屋伊三郎
泉屋伊兵衛
檜屋利兵衛
檜屋小兵衛
天満屋市兵衛
鮎屋宇三郎
榎並屋長兵衛
綿實
小松屋清次郎
播磨屋作次郎
布屋亀藏
小松屋孫二郎

3-43 住吉大神宮永代常夜燈 正(西)面台座部分
大阪絞油屋仲間 / 安政6年(1859) / 住吉大社提供

安政6年(1859)大阪絞油屋仲間 外72名

「なにわの海の時空間」平成21年度 夏季企画展 「大坂の水油」より

上記は、絞油問屋の奉納の石燈籠であるが、この他油関係では次の銘ものが奉納されている。

- 安政5年(1858) 泉州四郡油屋中 外9名
- 安政5年(1858) 泉州四郡油屋中 外9名
- 天保15年(1844) 大坂天満東郷菜種絞油屋 外6名
- 文久元年(1861) 大阪魚油中 外28名
- 寛政11年(1799) 北国積木綿屋中 大坂油町外21名

江戸時代末期になっても、地回りでは灯油を賄えない江戸の灯を支えたのは、こうした大阪の油問屋の力であったことを思い起こして、コラムを閉じることにする。